

## 東日本大震災における教訓

亙理地区行政事務組合消防本部

亙理消防署 署長 山本良一

当管内は、宮城県の南端に位置し、亙理町・山元町の2町で構成され、政令指定都市「仙台市」から南へ2.6kmの距離にある。管内の東部は1.6kmに亙り太平洋に面し魚介類が豊富で、特に秋になると鮭のイクラと身を使つての「元祖はらこめし」発祥の地でもある。

気候は、東北の湘南と言われるほど温暖で、その特性を生かし海岸線沿いに東北一の苺の産地を形成しているが、今回の津波により苺ハウスの90パーセント以上が壊滅的被害を受けた。

この2町を管轄する当消防本部は職員数73名で、亙理町に本署、山元町に分署と1署1分署体制で5万3千人の生命、財産を守っている。

消防業務を開始した昭和46年4月からの主な災害を振り返ると、昭和53年6月12日発生した宮城県沖地震（死者無し、住宅全壊8戸）さらには、昭和61年8月4日の台風10号では、床上浸水153戸、床下浸水712戸の被害となったが、その後約25年間に亙り大規模災害が発生していない。

発災当日は、隣の岩沼市で通信関係の会議に消防長、署長、副署長が出席、会議も終盤に差し掛かった14時46分、今までに体験したことのない激しい揺れに長時間襲われた。直ちに消防署に戻ろうとしたが、すでに国道4号は渋滞、県道、市道、町道を通り署に戻る。この時点では、家屋の屋根瓦落下、道路の陥没が見受けられたが家屋の倒壊はほとんど確認できない。

署に到着後、直に指揮車に乗り換え、町内の情報収集に出動する。海岸より7km離れた老人ホームでは、海岸線沿いの自宅に送ろうとしている所を、大津波警報解除まで移動しない様指示、海岸線沿いの広報に向かった。亙理町荒浜での広報開始間もなく、南へ約10kmの山元町新浜地区で広報中の山元分署タンク車より3mの津波第1波襲来の確認の無線を傍受、住民に間もなく津波が襲来する旨を広報中、前方200mに瓦礫を巻き込んだ約2mの津波を確認、亙理町役場荒浜支所に逃げ込んだ。外では何もない様に犬を抱いている住民など10名程おり、すぐ目の前に津波が来ていることを伝え2階に上げる。

2階にはすでに近隣住民、誘導した消防団員等150名が避難していた。ただちに庁舎東より津波の状況を見ると、すでに庁舎まで津波が押し寄せ80歳過ぎのお年寄りの女性が流されて行くのを見ている外なかった。消防人として、人を助けるのが任務のはずが、

ただ傍観しているだけで何もできなかったことに対し、自分自身の無力さを痛感させられた。

時間と共に水位が上昇しこのままでは2階が浸水する恐れがあるので、屋上に身体の不自由な年寄から上げ、何とか津波からの被害を逃れた。

翌日迎えに来たボートで、一面湖になっている瓦礫の中を署の方向に進むと、車が3台重なっている所より「助けてくれ」と叫び声が聞こえるので近寄ると、家族4人が生存しているのを確認し救助する。家族の話では、逃げる途中津波に流されたが運よく車の上に重なり、濡れずに済み寒さに耐えることができ助かったが、隣の車から叫ぶ声が聞こえ、次第に聞こえなくなると話された。付近の車両も確認するが、要救助者は確認できない。

3月13日より愛知県隊が緊急消防援助隊として当消防本部管内の救助、検索活動を開始する。

その後、兵庫県隊、奈良県隊、福岡県隊が入り、合計1,115隊、4,003名の受援を受ける。我々にしては、初めての大災害で、当消防職員73名だけでは救助活動に限界があり、愛知県隊の1・2次隊、53隊228名を目の当たりにしたとき、安心感、心強さを感じ目頭が熱くなった。



緊急消防援助隊の検索活動状況

## 今回の消防活動での教訓として

1. 海岸線より4km内陸まで浸水、ボート無しでは救助及び検索が出来ない。当消防本部では、津波後アルミボート1艇、ゴムボート1艇、FRPボート1艇で救助活動を行ったが、ゴムボートは、瓦礫で破損した。
2. 東北ではまだ氷点下になる日も多く寒さの抜けない3月に、水に浸かり救助活動するには、ドライスーツ、陸上で活動する人も、ディスポガウン上下が防寒に有効である。
3. 流失した瓦礫が多く、検索中に踏み抜きする隊員が多発した。今後は踏み抜き防止の中敷きが必要であり、また、今回は破傷風防止に少人数であるがワクチン接種を行う。

大災害時には、緊急消防援助隊の応援が不可欠である。また、地元消防団員は地域住民の家族構成、勤め先等の場所が判り、救助、検索活動には地域に密着した活動の効果が大きかった。

これからも、この体験を風化させることなく後世に伝え、住民が安心・安全に住める街作りをしていかなければならないと思っている。



宮城県漁業協同組合亘理支所の被害状況